

本日は聖霊降臨日、ペンテコステ礼拝です。西仙台教会ではこの日を教会創立記念日と定めていて、今日で47周年を迎えました。聖霊降臨は使徒言行録2章の激しい風の音と炎のような舌が信徒たちの上にとどまり外国の言葉を語りだしたという出来事に端を発し、創世記11章のバベルの塔で人間の傲慢のせいで言葉が通じなくなった出来事とタイアップしています。実はこの旧約とのつながりは、もうひとつ、創世記1章にもあるのです。1章2節に「神の霊が（混沌とした）水の面を（覆い）動いていた。」とあります。イエス様は、伝道開始の時、バプテスマのヨハネから洗礼を受け、「神の霊」を受け、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」とのみ言葉が語られました。今日の聖書の箇所では、イザヤ書41章が引用され、18節「見よ、わたしの選んだ僕。わたしの心に適った愛する者。この僕にわたしの霊を授ける。」とあります。ここで「僕」と訳されている言葉は、実は「子」とも訳され、受洗の時のみ言葉にあった「愛する子」と符合します。さらにマタイ17章の「山上の変貌」で、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声が繰り返されます(17:5)。つまりイエス様は、神の霊を受けたメシアであるということが示されているのです。この神の霊が教会に引き継がれたのがペンテコステの意味です。この神の霊に覆われると何が起こるのか、そのことをイエス様の模範を通して学びたいと思います。

今日の箇所は、この前の9節からの箇所、「安息日の癒し」から続いています。イエス様は安息日に「片手の萎えた人」を癒されました。それが安息日だったために、指導者階級のファリサイ派は、「どのようにしてイエスを殺そうかと相談した」(12:14)とあり、そこでイエスは身を隠した(12:15)とあります。たまたま休日だったからと言って、その日に仕事をしただけで殺されるというのは、現代の私たちには理解できないことですが、当時の人々にとっては真剣な問題でした。

紀元前167年、イエス様の時代からほんの数世代前に、シリアのアンテオコス四世エピファネス（その意味は「現人神」）は、エルサレムを攻撃しました。ユダヤ人はマカベアを指導者として応戦しましたが、安息日には一切武器を取らず、エピファネスは殺戮をほしのままにしたのです。彼とその子らは捕えられ、父親の見ている前で子どもらは手足の指を切断され目をえぐり取られるなどの拷問を受けました。ところがエピファネスは突然病死してしまい、マカベアは勝利しました。この伝統を受け継いだのが、実はファリサイ派だったのです。安息日はすべてを神様に委ねる大切な掟であり、ユダヤ人が命がけで守ってきたものであることを考えれば、どうしてイエス様の行動が怒りを買うものであったのかがお分かりになるとと思います。あと一日、たった一日、待ちさえすれば堂々と癒すことができたのですから、その一日が待てなかったのかということになるわけです。

安息日の本質は、創世記1章にあるように、神様が無から有を、混沌から秩序を生み出され、「良しとされた」(創世記1:4,10,12,18,21,25,31)、その御業に信頼して委ねることに

あります。つまり苦しみを神様に委ね平安を得ることです。どうしてイエス様は「手の萎えた人」を前にして、神様の御心として受け入れることをなされなかったのでしょうか。ここで視点を変えて、この「手の萎えた人」の目線で見てください。彼は自分の病気に苦しみなながらも、なんとかこれを受け入れようと苦闘していたかもしれません。けれども今、彼は自分の苦しみが、イエスを訴えるための口実として利用されるとい、まさに辱めを受けているのです。できれば隠しておきたいハンディキャップです。どんなに惨めな、いたたまれない気持ちでいたことでしょうか。ここに、この男に対する人々の祝福はあったのでしょうか。ここに、「神は良しとされた」はあったのでしょうか。神に委ねる平安はあったのでしょうか。ここにあったのは、この男に対する「ダメ」宣告以外の何ものでもありません。まさにこの状態は安息の本来の意味を破っているのです。ここで、その手を癒すということ以上に、神の「良し」を表わす手段があったのでしょうか。神が苦しみから平安を生み出す御業をなさり、それを良しとして祝う。この男性にとって、まさにこの安息の意味が成就したのです。

けれども人々にはこの男が見えていませんでした。この男は、単なる道具、イエスを訴えるための口実としてそこにいるだけだったのです。その後のイエス様の行動は、「そこを立ち去る」(12:15) ことであり、「御自分のことを言いふらさないように戒められる」(12:16) でした。イエス様は身を隠されたのです。それは力ある人々の殺意から逃れるためでしょうか。イエス様は見えない者となりました。もっと言えば、見えない人々と連帯する、その道を選ばれたということです。

世間の人々は、障害者に対して、その障害がなければいいのという視線を向けます。そこに安息はありません。「傷ついた葦」、折れかけた花を見れば、抜き取って新しいものを植えよう、「くすぶる灯心」に気づけば、使い物にならないからと捨て去り、新しいものと取り換えることを考えます。そうすれば安心だと考えます。しかし「傷ついた葦」「くすぶる灯心」にとって、そう見られそういう扱いを受けることは安息ではありません。聖霊を受けた神の子メシアは、真実の安息をもたらす方です。「傷ついた葦」は、そっとそのままに、大切に守られるのです。「くすぶる灯心」には、そのかすかな明かりをそっと守られるのです。聖霊を受けた神の子メシアは、人々の眼中にない人々、障害者、異邦人と連帯し、その人々の望みとなります。

さて、ペンテコステの意味、聖霊を受けるとはということでしょうか。それは私たちの中にいる人々、苦しみを抱えている人々に対して、「こうなればいいのに」とか「ああなればいいのに」という願いを抱くことではなく、見えない人々と連帯し、そのままで神がよしとされたということ信じ、「傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さず」にいること、まさに創世記第1章を生きることなのです。